

「研修会等名称」

大学イノベーション研究所第三回記念セミナー

場所：大正大学

期間：6月3日

1. 研修の内容

全国の高校で講演している山内太地さんから、現在の高校の状況を聞いた。早慶上智ICU、G-MARCH(学習院、明治、青学、立教、中央、法政)、成成明学獨國武(成蹊、成城、明学、獨協、國學院、武蔵)、日東駒専、大東亜帝国(大東文化、東海、亜細亜、帝京、国士館)といった大学のヒエラルキーに、皆が囚われているのではないかという問題提起があった。21世紀型スキルが求められる中、ICT教育などをいち早く取り入れ、めざましい教育実践を行っている高校の事例を複数聞くことができた。

大阪の四番手の公立高校の箕面高校では、ベルリッツと共同プロジェクトで、高校生の英語のアクティブラーニングが行われていた。ベルリッツと教員がお互いに知恵を出し合い、ディスカッションやプレゼンテーションを取り入れたボトムアップ型のプロセスで授業を作った。スカイプによるアジアの学生との英語の会話などを通じ、高校生たちはみるみる英語力をつけて行った。海外に行き、MITのプロジェクトに参加することで、能動的に学習するマインドを形成してきていた。海外の大学で取り入れているホワイトボードミーティング(ホワイトボードを通じて議論をマッチング)や、図書館をスタンフォード大学のdスクールのように机と椅子を円卓に変えて生徒たちが車座になり議論した。結果として、平成26年度はTOEFL61-80が2人だったのに20人、81-100も2人、101-120も2人出した。また日本でのミネルヴァ大学合格第一期生を出すほか、アメリカの海外に多く留学生を出す結果を出していた。

ミネルヴァ大学日本事務所の山本秀樹さんの話からは、メディアで聴くオンライン教育のイメージ以上に、ミネルヴァの手法が、アクティブラーニングが主流であり、革命的な教育コンセプトを持っていることがわかった。

札幌新陽高校の荒井優校長は、ソフトバンクの社長室に勤務、グループ会社の取締役を歴任していたが、新陽高校の創業者の孫として立て直しに着手するため転職。公益財団法人東日本大震災復興支援財団の専務理事として東北の復興支援や福島県立ふたば未来学園高等学校の設立に関わり、経済的に困難な高校生への給付型奨学金「まなべる基金」を創設して2000人に給付、また子どもたちの声を反映させる「双葉郡子供未来会議」を運営してきた荒井氏は、その経験や民間のノウハウを生かして、最底辺の高校の入学者数と成績の上昇をなしとげ、その実践が語られた。オープンスクールや説明会を繰り返し、外部への発信力やSNSを生かし、また北海道の教育委員会を巻き込む教育プロジェクトを企画した。東北の復興支援で「地域が元気になっていくには高校生の力が欠かせない」ということを学んだという彼は、地域とコミュニケーションしながら高校を作りつつある。

工学院大学付属中学教頭の高橋一也先生(世界のベストティーチャー賞受賞)からは、海外での新しい教育方法を高校に取り入れている実践について聞いた。エンゲストロームの「学びの拡張」やヴィゴツキーの最近接発達領域(一人よりもみんなでやった方ができることが広がるという考え)理論によるグループ学習、Edmodo(先生・生徒・保護者をつなぐ教育向けコミュニケーションツール)を使ったICT教育など、教室に閉じ込められた現象での学校教育を批判する方法が行われていた。

また、100名近くの参加者とワークショップでたくさんの交流や議論を行った。

## 2. 研修の成果

教育実習訪問で高校に行くと、高校教育では受験勉強の枠組みに強く拘束されているイメージをいつももっていたが、受験勉強の枠組みを突破して、アクティブラーニングやICT教育を取り入れることで、学生のモチベーションがあがり、結果的に、入試でも成績を出すことが可能であることを知った。さらに、今回の実践が、トップ進学校ではなく、中堅や底辺の高校であり、学生の心が折れているようなケースもある中、子どもを褒めまくって勉強する主体に形成していく現場の明るい実践に驚嘆した。また、経費がない中、企業を共同プロジェクトに巻き込んで成功させていく手法、それを学内や保護者や地域に伝えたり、教育委員会を巻き込んでみんなで教育を作っていくプロセスの創造性に驚いた。学生も教員も協同で取り組む中で、学習に対する態度が変化してくることが観察できた。また、企業経営や海外での経験を生かした人々のクリエイティブな手法が生かされていることがわかった。

彼らは、長期的に日本社会に必要なクリエイティブで能動的な人材を作ることを信念として取り組んでいた。教育の原点を見るようだった。

## 3. 授業への研修成果の反映状況

教育はどうしてもパターンリスティックになる。どうやってそれを脱するかヒントを得た。また、実際、彼らの現場に行くとさらにノウハウを学び、または、愛大に来てもらって、取り入れることができないかと考える。

教育を作っていく過程そのものの協同性の重要性を改めて感じた。